

# アイヌ世界の妖怪

水木しげるさんの漫画作品には様々な妖怪や精霊が登場するのは誰もが承知のことですが、アイヌの人々だけで生活をしてきた時代には、不思議な力を持った妖怪が北海道をはじめ、樺太、千島列



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター  
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレイ国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モントレイ校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

島中に沢山住んでいました。北海道で有名なのはケナシウナルペ(kenas 木原、unarpa おばさん)で、普通は髪の毛がぼさぼさの老婆の姿をしているそうです。山の中にキノコや薪が持っていけと言わんばかりに山盛りにして置いてあるとき、それを頂いてしまうと、美女の姿で現れ、その人間の命を奪うと言われていきます。ケナシウナルペと夫婦であるとも言われるキムナイヌ(kim 山手、un にいる、aynu 人、山男)という大男の人食い妖怪もいます。人を食うとされるにもかかわらず、キムナイヌは血が大嫌いです。古傷を見せて説明するだけで脱兎のごとく逃げ出すそうです。山中で突風が吹き、木の枝が折れ、葉が乱舞するのはこの妖怪が近くにいる証拠です。運悪く出会った時には、妖怪の好物の煙草を「どうぞ吸ってください」と言って置くと危害を加えられることはありません。この妖怪はキムナイヌという名前を呼ばれることを嫌がり、キムンアチャボ(kim 山手、un にいる、acapo 叔父さん)という親しみのある名前のほうを好みます。

日本の妖怪と同じ種類のものの一つに河童かっぱがいます。アイヌ語ではミントウチ(日本語みずちの移入語)と呼ばれ、7~8歳の男の子の姿をしているそうです。特徴的なのは、足が内側にひどく曲がっていることです。頭にお皿があるのは日本の河童と同じで、このお皿に水が入っていると馬鹿力で馬でも人でも水に引きずり込んでしまいます。また、言葉を話すこともできるので、人間の村に遊びにくることもあります。時には悪さもします。あるとき、親が数日間も出かけていて、留守番をしていた女の子のところにミントウチ

が訪ねてきて遊ぼうと誘います。一度誘いに応じて、遊ぶと次の日もその次の日もやって来ました。女の子はさすがに様子がおかしいと気づき、火の神をはじめ家中の神に祈ったところ夢を見ました。

夢の中で神様は、河原に行って丁度お尻にはまる大きさの石を拾ってきて、ミントウチが来てもその石の上に座って動かないようにと女の子に教えました。女の子が神様に言われたように、河原から拾ってきた石の上に座っていると、またミントウチがやってきました。実はミントウチは生き物の内臓、特に腸が好物で、女の子のそれを食べようと狙っていたのです。しかし、石に邪魔されて女の子には手出しできず、ミントウチは逃げてゆきました。

一方で、ミントウチが人間を助けたという話もあります。ある男の子は母が亡くなり、父も病気のため、独りで家族を養っていました。ある時、誰かに呼ばれて振り向くと大きな鹿が倒れていました。これはミントウチが健気けんげに働く男の子に感心して食料を置いたということです。男の子もイナウを供えてミントウチに感謝したところ、その後も同じ場所を通るたびに食料が置いてありました。

アイヌの人々の生活は多くの神々に囲まれていただけでなく、そこには妖怪のように、神でも人間でもないものたちもいました。神々やこのような目に見えない様々な精霊たちとの関連性のうえに成り立っていた生活というのはお伽話とぎばなしのように聞こえますが、アイヌ民族にとっては正に現実だったと言えます。科学を絶対視し、目に見えるものの存在だけを認め、見えないものへの恐れや神への敬意を忘れた現代の私たちの暮らしと比べると、ずいぶんと多様性に富んだ生活ではないでしょうか。

\*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長  
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部(滝川市)で開催のペカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『知里真志保フィールドノート(6)(7)』(北海道教育委員会、2007、2008年)、『平成20~29年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~9』(北海道教育委員会、2008~2017年)等。